

氏名(本籍)	おお くま さかえ 大 熊 榮 (神奈川県)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 1985 号
学位授与年月日	平成 16 年 1 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	「複合自我」表象の文学－サルマン・ルシュディ論－

主 査	筑波大学教授	博士(文学)	荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	加 藤 行 夫
副 査	筑波大学教授		井 上 修 一
副 査	筑波大学教授	文学博士	鷺 津 浩 子
副 査	筑波大学講師		吉 原 ゆかり

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、インド生まれで現代イギリスの作家サルマン・ルシュディの作品群にみられる「複合自我」表象のあり方とその意味を考察し、「複合自我」の概念が、ポスト・コロニアリズム時代の多元主義やセキュラリズム問題と表裏一体になっていることを解明し、「複合自我」表象に潜むポストモダニズム的自己中心主義が、イギリスの同時代作家たちにも広くみられる現象であることを解明したものである。本論文は、以下の5章からなる。

第1章 モチーフと目的

- 1-1 「複合自我」の定義にむけて
- 1-2 議論の手順
- 1-3 先行研究管見

第2章 サルマン・ルシュディの半生

- 2-1～2-18 (目次詳細省略)

第3章 「統合自我」と「複合自我」

- 3-1 「自我」論における「複合自我」概念の位置
- 3-2 「複合自我」の組成としての「雑種文化」と英語
- 3-3 「統合自我」をめぐって
- 3-4 「統合自我」の亀裂

第4章 サルマン・ルシュディの「複合自我」表象

- 4-1 「複合自我」の象徴としての鳥－『グリマス』について
- 4-2 「複合自我」の「歴史」的位相－『真夜中の子供たち』について
- 4-3 「複合自我」の「政治」的位相－『恥辱』について

- 4-4 「複合自我」の「移民」的位相－『悪魔の詩』について
- 4-5 「複合自我」の「愛」の位相－1989年以降の作品について

第5章 結論－「複合自我」表象の意味

- 5-1 ルシュディの文学史的位相
- 5-2 「複合自我」表象の意味
- 5-3 同時代作家と「複合自我」表象

References

第1章においては、いわゆる『悪魔の詩』事件が、サルマン・ルシュディにもたらした誤解を解くことが本論文執筆動機であるとした上で、ルシュディが「複合自我」表象にこだわる理由を解明するという本論文の主要目的が説明され、「複合自我」にたいするルシュディ自身の定義が確認され、先行研究についての説明が詳細になされている。

第2章では、1947年から2002年までルシュディの辿った半生がいかなるものであったかが伝記的に記述され、それにもとづき作家ルシュディの「複合自我」の実像が明らかにされている。また、同時に、7編の長編小説を中心に彼の作品世界が紹介されている。

第3章では、ルシュディ自身のいう「複合自我」の概念がいかなるものであるかが、哲学や社会心理学の知見をもとに多角的に検証され、なかでもG・H・ミードの「社会的自我」概念との類似が指摘されている。また、ルシュディ自身の概念は、19世紀の「統合自我」概念との対比において形成されているとし、そのために、19世紀の小説家ジェイン・オースティンの『エマ』、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、トマス・ハーディの『ジュード』、さらには20世紀初頭の小説家E・M・フォースターの『ハワーズ・エンド』の分析を介して、「統合自我」表象がいかなるものであったかが解明されている。

本論文全体の半分以上を占める第4章は、本論文の主要部をなしている。「複合自我」表象という視点から、ルシュディの2002年までに発表された7編の長編小説、つまり、『グリマス』『真夜中の子供たち』『恥辱』『悪魔の詩』『ムーア人の最後の溜め息』『彼女の足下の地面』『怒り』が分析の対象とされ、「メタフィクション」世代後のルシュディが、どのような文学史的位相を占めているのか、また、彼の「魔術的リアリズム」と呼ばれる手法がいかなるものであるのか考察されている。自らの「複合自我」を20世紀後半のポスト・コロニアル時代に出現した新たなものと見ているルシュディが、いかにその「自我」にこだわり、その表象のために新たな文学的方法を編み出してきたか、その経緯が詳細にのべられている。

結論にあたる第5章では、ルシュディの「複合自我」表象には、神を信じない多元主義者にして多文化主義者、そしてセキュラリストである作者自身の自己弁護が基調低音として聞き取れると指摘され、そのような新種の自己中心的文学は、ひとりルシュディのみに見られるわけではなく、1980年代イギリスの多くの作家にも見られるとし、いかにルシュディがそうした「1980年代」という世代作家の代弁者たりえるかが述べられている。

審査の結果の要旨

本論文は、サルマン・ルシュディの日本で最初の本格的な研究である。方法論的にいえば、著者は、伝記的研究を標榜し、ニュークリティシズムの作品論やポスト構造主義の記号論や文化表象論とは一線を画そうとしているが、全体として現代人の思想問題に踏み込み、新しい学際的な作家論を構築している。伝記的な研究手法は、イギリスの正統的な方法であり、長年イギリス文学研究に従事している著者は、十分その方法に習熟している。その力量が顕著に示されているのは、サルマン・ルシュディの半生を扱った第2章である

う。1989年2月に発生した『悪魔の詩』事件以降の膨大な資料を収集し、そこに鋭利な分析を施し、新たな事実を抽出した手腕にみてとることができる。この地道な作業を介して、著者は、ともすれば誤解されがちなサルマン・ルシュディの「複合自我」的実像を冷静かつ克明に描き上げている。

著者は、ルシュディを「自分のことしか書かない作家」とみる。とりわけ、ルシュディは、自身の「自我」に執着し、それを執拗に観察しつづけ、それが7編の長編小説として結実した。それらは「複合自我」小説群とも呼ぶべきものであると著者はいい、各作品の丹念な分析をもとに、「複合自我」の4つの位相、つまり「歴史」「政治」「移民」「愛」を析出し、さらに各位相の綿密な分析を介して、ルシュディの内に、狂気・快樂主義・多元主義・多文化主義・無信仰・世俗主義・身体主義などが潜んでいることを発見した。実は、これらの問題は現代人の思想の問題にはかならず、こうした「複合自我」は、当然、原理主義と衝突せずにはおられず、それこそ『悪魔の詩』事件の真の原因であった、と著者は論じている。しかし、本論文は、「複合的自我」の問題をルシュディの個人的問題に限定するだけでなく、さらに同時代の作家たちとの関係にも及んでいる。「複合自我」にこだわり、それを自己の問題として作品を書きつけてきたルシュディではあったが、実は、「1980年代」の代弁者となっていると著者は主張し、マーティン・エイミスやハニフ・クレイシなどの同時代作家に「複合自我」を読み取り、ルシュディの文学史上の位置を確定している。また、19世紀以来の小説史の流れにルシュディを位置づけるなど、本論は、単に、ルシュディの個別作家論にとどまることなく、文学と思想の動静を時代的に解明した幅の広い史的研究にもなっている。さらに、本論文は、文学と思想の学際領域に、一見古いとみられる伝記的方法による「自我」表象研究という新機軸を打ち出したものと評価できる。

このように斬新で学術性の高い本論文ではあるが、まったく問題がないわけではない。たとえば、「複合的自我」を多様な文学作品に読み取るあまり、各作品の特殊性・個別性が看過されてしまい、また、テキストが、作家の思想・心情・感性を忠実に反映したものとする素朴な作品テキストの扱い方は、とくに問題が残る。テキスト論的にいえば、そうした作者の意図は、言語の特性のために裏切られるとされているので、もし、その議論を無視しようというのであれば、それなりの理由付けが必要であろう。

しかし、こうした欠点も、本論文の価値を損なうものではない。そもそも本論文は、伝記的研究方法による作家論を標榜したものであり、その範囲内では論述は一貫し、完成度の高いサルマン・ルシュディ論となっており、学界に大きな貢献をするものであると評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。